

古代銭貨史に関する再検討： 前近代日本貨幣史の再構築にむけて

すず きみ お
鈴木公雄

■ 要旨に代えて

慶應義塾大学名誉教授・鈴木公雄先生は、2004年10月22日に逝去されました。鈴木公雄先生には、1999年4月27日から2004年10月7日まで、日本銀行金融研究所において17回にわたって開催された貨幣史研究会・東日本部会の座長として研究会の運営と集会での議論を全面的にリードしていただきました。本稿は、鈴木公雄先生を研究代表者とする3人の研究者の方に金融研究所が委託した貨幣史研究の成果物であり、本号の金融研究に掲載されている2編の研究論文の解題的なものとして、鈴木先生が執筆され、2004年3月に金融研究所が受領したものです。謹んでご冥福をお祈りいたしますとともに、生前の鈴木公雄先生のご尽力に心からの感謝を表したいと思えます。

(日本銀行金融研究所長 翁 邦雄)

キーワード：貨幣史研究、銭貨流通、古銭学、富本銭、皇朝十二銭、渡来銭、出土銭

本稿は、日本銀行金融研究所からの委託研究論文である。ただし、本稿に示されている意見は日本銀行あるいは金融研究所の公式見解を示すものではない。また、ありうべき誤りは、すべて筆者個人に属する。

鈴木公雄 慶應義塾大学名誉教授

1. 本研究の目的

日本銀行金融研究所は、近年とみに活発化してきた日本貨幣史研究にかかわる各分野における新しい発見・研究成果の吸収と、それらに基づく日本貨幣史の再検討、さらには、その成果を取り入れた貨幣博物館の展示活動の活性化を視野に入れた研究会活動を実践してきた。東日本の研究者を中心に組織された「東日本部会」と関西以西の研究者から構成された「西日本部会」の2つの下部研究会組織を設け、それぞれ年に数回の研究会を開催することが計画された。

それぞれの研究会の具体的な活動方法としては、日本史、経済史、貨幣史、考古学などの分野で、近年の貨幣史研究における先端的な研究を開発している研究者を招待し、各研究者の見解の紹介と、それに基づいて各分野の専門研究者による質疑と討論を行い、問題点の明確化と新しい成果の吸収、さらには今後の研究方向の展望などを行おうというものである。

その第1段階として、平成14(2002)年度には、富本銭の発見とその再評価を中心として、近年とみに活況を呈してきた古代銭貨に関する問題を取り上げた。この分野は日本貨幣史において、すでに戦前から数多くの研究が蓄積されていたが、全体的な資料の希少性に妨げられて、研究の進展に多くの困難が横たわっていた。近年の都城址発掘の進展に伴って、富本銭をはじめとする新しい資料が発見され、それらの評価をめぐって、戦前からの貨幣史研究の枠組みが、大きく変化する契機が訪れつつあった。

このような状況にかんがみ、平成14(2002)年度においては、奈良県飛鳥池遺跡の富本銭の調査において、中心的な役割を果たした奈良国立文化財研究所の松村恵司氏と、戦後における古代銭貨史研究において、律令財政史の観点から、古代銭貨の流過程という斬新な切り口を提示された大阪市立大学の栄原永遠男氏から、最近の古代銭貨研究の現状についての報告をお願いした。

この研究会が軌道に乗るに従い、そこでの発表成果を、研究会の活動ニュースレター的な報告にとどめるのではなく、発表者に討論の結果などを取り入れた成果物として取りまとめていただき、新しい論文として刊行してはどうかという考え方が生まれてきた。そして、それらの研究成果を後続する中世以降の研究会活動の内容と結合させていくことにより、全体としての本研究会の目的、すなわち日本貨幣史の再検討という課題が、より具体的かつ鮮明に提示できるのではないかと考えられるに至ったのである。本稿は、以上のような経過を紹介し、本研究会の目的を明らかにするとともに、今後の研究会に関する全体的な研究計画を述べようとするものである。

2. 古代銭貨史研究の新展開と今後の課題

古代銭貨の研究はすでに江戸時代から開始され、戦前においても数多くの論考が蓄積されていることは周知の事実である。しかし、これらの研究の多くは、「記紀」、「六国史」などの古典、さらには「正倉院文書」をはじめとする断片的な文書資料に記載された文献記録に依拠する貨幣制度史的な研究、ないしは和同開珎を中心とした古銭学的研究が主体をなすものであった。

文献を中心とした研究においては、全体としての日本古代史における文献記録そのものの希少性から、必ずしも十分な分析・検討が行えない状況にあった。さらに洋の東西を問わず、いずれの地域・時代の貨幣研究においても、詳細な統計資料が出現してくる近代以前にあっては、貨幣に関する記録は断片的である。この傾向は実際の貨幣使用の状況、つまり貨幣の流通実態に迫ろうとすると、とくに著しい阻止要因となる。このような二重の制約から、近代以前の貨幣史研究が、もっぱらその制度史的側面ないし個々の銭貨に関する個別的研究に重きを置かざるを得なかったのも、やむを得ない事情というべきであった。

このような研究の狭間を埋めるものとして、古銭学的研究が一方では展開していた。なかでも、わが国最初の銭貨と考えられる和同開珎は、個人のコレクションとして相当数が伝世され、それらについての古銭学的研究は「銭譜」という形をとって江戸時代中期以降さまざまな形で行われており、いわゆる皇朝十二銭と呼ばれる古代銭貨については、その形態的研究を中心として極めて豊富な蓄積がある。

古銭学的研究は、銭貨そのものの形態的特徴の追求に基づく分類、鑄造地の推定、真贋の判定といった、他の分野の銭貨研究にはない独自の特徴を持つものではあるが、あまりに個々の銭貨の問題に集中するあまり、貨幣研究が追求すべき、貨幣使用の歴史の変遷や、その意味付けなどが希薄となる傾向がある。この点で、古銭学の研究目的は、貨幣の歴史的な性格とその変化を追求する経済史や貨幣史の目的とは、必ずしも合致しない。このような傾向から、従来の経済史や貨幣史研究には、古銭学の成果が十分に生かされているとはいえず、むしろある面からは相容れないものとして、アカデミズムからは敬遠される傾向すらあった。

しかしながら、近年における考古学調査の進展に伴う出土貨幣の増加は、この障壁を取り除きつつある。すなわち、都城址をはじめとする古代遺跡の発掘調査によって、極めて信頼度の高い出土資料として銭貨が発見されるようになり、それらの銭貨を考古学的に整理・分析する過程で、従来いわれていた古銭学的知見が適切なものとして再評価されるような状況が生まれてきたのである。例えば、江戸時代以来伝世していた富本銭の一部が、発掘で出土した富本銭と形態的によく一致するばかりでなく、それらが和同開珎に極めて類似した手法によって製作され、わが国における出現期の銅銭であるとする今井風山軒の考察の再評価などは、その代表的な事例といえる。このような経過を通して、従来あまり緊密でなかった古銭学的研究と経済史、貨幣史的研究の接点が新たに生まれようとしている。

伝統的な古代史研究の分野においても、従来の貨幣制度史研究の枠組みに対して、

財政史、流通史の視点を加味しつつ、新しい古代銭貨研究の側面が、栄原永遠男によって切り開かれてきた。この視点は、律令政権が発行した皇朝十二銭と総称される銭貨群が、律令国家の財政、政策さらには古代の流通経済においていかなる機能と役割を果たしたのかという、本来貨幣史が追求すべき根本的なテーマに迫ろうとする試みであった。そしてこの問題を追求するに際して栄原は、本来は考古学の分野においてまずなすべき仕事であった、古代出土銭貨の集成的研究を基礎に据えたのである。そして、古代銭貨出土遺跡の分布を追求することから、古代における銭貨を中心とした畿内経済圏ともいべき流通圏の存在する事実が浮かび上がってきたのである。

以上の経過から、古銭学、古代史、考古学などの諸分野を加えた、新しい貨幣史研究の枠組みが形成されつつあることが理解されるだろう。事実、栄原の一連の研究はすでにその傾向を先取りしたものとして評価されるべきである。しかしながら、このような新しい研究の方向性をより確固としたものにするためには、なお多くの点で検討すべき部分がある。本研究会が目指す点もそこにあるのであって、そのためには最近の研究動向を踏まえたうえで、今後いかなる問題点を追求していくかについての整理・分析が必要となろう。

全体的な資料不足による古代銭貨史研究の閉塞感を払拭し、新しい研究の地平を切り開くきっかけとなったのは、何といても富本銭の発見と、それに付随して起こった銭貨の考古学的研究にあった。これにより、古代貨幣史研究は、学術的な発掘に基づくファーストハンドの資料を入手することが可能となったからである。しかし、この新しい資料を、従来の古代史研究の成果とどのように関連させ、古代貨幣史研究の中に定位させるかについては、なお若干の経過を必要とした。それは、とりもなおさず、考古学資料と文献記録という、質の異なる情報源を、どのように統合し、1つの歴史像に結実させるかという、方法論上の問題にもかかわることであったからである。

この過程で、富本銭 = 厭勝銭説をはじめとする、さまざまな見解が提示された。これらの経過は別掲の松村論文に詳述されているので、多くは繰り返さないが、最終的には奈良県飛鳥池遺跡の調査とその出土品の詳細な考古学的分析、とくに飛鳥池遺跡における富本銭出土層位の詳細な検討と、多数の銭貨鑄造関係資料の分析によって、富本銭が和同開珎の鑄造に先行して組織的に製作された銭貨であることが確定的となったのである。

今日の古代銭貨史研究の課題は、このような新しい成果に基づいてこれまでの研究成果を再検討していくことにある。しかしそれは、単なる先行研究の批判や訂正のみを目指すものではない。むしろ、多くの先行研究が乏しい資料の中から抽出したさまざまな成果を補完、強化したり、さらにはそれらについての新しい意味付けを探っていく作業こそが重要であろう。このような観点から、今後の主要な研究課題を展望するとすれば、以下のような点が指摘できる。

(1) 古代出土錢分布の全国的集成とその歴史地理学的検討

栄原が明らかにした古代錢貨流通という枠組みの中で、新出の資料を含めたより広範な出土錢分布調査を実施すべきである。筆者らは、全国的な規模における古代錢貨の出土分布を集成しているが、それによると、かつて栄原が明らかにした畿内経済圏の存在が、極めて明瞭にたどり得る。そのみならず、畿内以外の律令諸国における分布状況も明らかとなり、その分布が極めて薄いことから、逆に畿内経済圏の持つ重要性和、畿内とそれ以外の諸国との格差が明瞭になる。さらに大宰府の存在した筑紫、伊勢神宮の存在した伊勢、畿内ではないが大津宮の存在した近江など、律令政権と関連の深い諸国の出土が、他の諸国よりも多いこと、さらにそれ以外の諸国においても国衙、国府周辺ないしは駅路に沿った地域に出土例が多い傾向がみえる場合がある。また信濃、陸奥のように、富本錢や皇朝十二錢が古墳の副葬品として出土している例も存在するなど、古代錢貨の使用状況の差異を具体的に示すような事例の存在も明らかになってくる。これら古代錢貨の出土分布状態を、単なる分布図としてではなく、その分布密度を考慮に入れ、さらにその歴史地理学的視点を加味しつつ分析することによって、古代における貨幣使用のさまざまな側面が、より明確になると期待される。

(2) 古代～中世物価史研究(估価法)と錢貨流通動態の関連

従来から問題とされてきた、古代の後半において、皇朝十二錢が鑄造されなくなった10世紀後半以降、中国からの大量渡来錢の使用が軌道に乗り始める12世紀後半までの、約1世紀以上にわたる錢貨使用の中断期間を、貨幣史としてどのように評価するかは、依然として不明な点が多い。この問題は、古代史の側からの追求のみならず、中世史からの遡行した研究が必要であろう。これには最近活況を呈している中世考古学からのアプローチが重要な役割を果たすと思われるが、それ以上に重要なのは、古代史から中世史への移行を、経済史的観点から整理していくことにあると考える。具体的に問題を指摘するならば、古代の物資の交換・流通において重要な機能を果たしていたと考えられる估価(交易価格)に関する問題である。估価については律令関市令に明瞭に記載、定義されているものの、その運用の実態は十分に明らかにされているわけではない。さらに注目すべきは、中世においても估価が物価決定における重要な問題として考えられていたことからわかるように、古代から中世にかけての物価史、流通史において、重要な接点となる問題を明らかにし得る可能性を持っている。錢貨の流通、錢貨の価格と估価とは密接に関連していたと推測されるにもかかわらず、その実態について十分な評価がいまだに下されていない。古代から中世にかけての、この種の資料の乏しさという制約があることはいうまでもないが、錢貨と估価との関係、さらには古代の後半において姿を消した錢貨が、中世においてその使用が復活する点など、古代錢貨史研究が新出の錢貨資料を取り込みつつ、改めて追求すべきテーマといえる。

3 . 前近代日本貨幣史の再構築

近年の錢貨史における新しい研究動向は、古代のみならず中世、近世の貨幣史研究の再検討という状況の中で考えるべきものといえる。そして、その根底には、ここ数十年のあいだにおける日本歴史考古学の進展に伴う、出土錢貨研究の台頭という大きな動向がある。

1980年代以降本格化した東京都心部再開発の結果、江戸市中に存在していた近世遺跡、とくに墓地遺跡の調査によって、六道錢と呼ばれる埋葬錢貨が大量に発見され、それらの錢貨を経済史、貨幣史的観点から分析する研究が行われるようになり、出土錢貨研究による貨幣史研究が新たな可能性を持って登場してきた。都市再開発が首都圏から全国主要都市へと拡大されるに連れて、近世遺跡の調査も全国規模で普及し、六道錢出土墓の発見例も、総数4,500基に達するほどの量となった。

これらの近世錢貨についての流通状況を全国規模において、考古学的手法に基づく分析（セリエーション分析）の結果と、近世宿場資料の記録内容とを対比させつつ検討したところ、中世錢貨（渡来錢）から、近世錢貨（古寛永通宝）への流通通貨の交替は、従来の貨幣史研究が考えていたよりも迅速に完了していたことが判明した。さらにその過程において、幕府が金・錢相場の変動を巧みに利用した、極めて開明的な錢貨政策を実施していた事実も明らかとなった。かくして、出土錢貨と近世経済史資料との結合による、近世錢貨流通史の復元という、新しい視座が結実したのである。

このような動向を受けて、明治期以来主として古錢学的視点から取り扱われてきた中世出土錢（大量出土の備蓄錢）についても、中世遺跡の発掘調査に基づく確実な事例が増加してきた。そしてこれらの中世出土錢が持つ、中世錢貨流通史復元の重要な情報源としての有効性が多くの研究者に認識されるようになり、ここに出土備蓄錢を中心に据えた中世錢貨流通史研究の気運が高まってきたのである。

総数約300万枚以上に及ぶ中世出土備蓄錢のコンピュータ処理に基礎を置いたデータベースの作成を通じて、中世錢貨流通が13世紀後半から中世末の16世紀に至る約300年以上の期間にわたって、いくつかの段階を経て生成、展開、衰退していった状況が具体的に明らかとなった。そしてこの出土備蓄錢の研究成果と、従来から積み重ねられてきた文献資料による中世経済史研究の成果とを対比させて検討することから、中世の錢貨流通、貨幣使用の状況、撰錢令の解釈など、従来不明の点が多かった中世から近世にかけての貨幣動向や錢貨流通の変遷過程などが、新しい視点から再検討される気運をもたらしつつある。

以上のことから明らかなように、近年の貨幣史研究は、従来の文献記録に基づく貨幣経済史、制度史的研究、歴史的、経済史的文脈からは距離を置いた古錢学的な錢貨の個別研究などに加えて、新しい研究動向が顕著になってきたことに注目すべきである。すなわち、出土資料に基づく考古学的研究、さらには貨幣を経済活動のメディアとしてだけでなく、その使用される社会的状況を含めた貨幣使用の習俗として扱う民俗学的研究など、幅広い形で錢貨研究が展開されている点に、大きな

特徴があるといわねばならない。

本来銭貨というものは、経済活動のみならず、政治、文化、社会の各方面と幅広く結びつく存在であり、いわばそこには人間 - 貨幣関係とでも総称すべき状況が存在している。したがって、今後の貨幣史研究の射程は、これら学際領域間に展開している多様な研究成果、視点を吸収しつつ、新たなる貨幣史の構築に向かうべきであろう。本研究はまずそのようなケースワークの1つとして、「古代銭貨史に関する再検討」を行ったものである。今後はこの枠組みを中世から近世へと拡大しつつ、トータルな意味での前近代日本貨幣史の再構築を目標に定め、研究会活動を展開し、その成果を問うていきたいと考えている。すでに平成15(2003)年度においては、中世貨幣史の研究会を幅広い研究者を招いて開催し、中世銭貨史に関する再検討を積み重ねてきた。これらについても成果の公表を行う予定であり、同様の企画を近世においても実施し、それら各時代の研究成果を結合させつつ、全面的な前近代銭貨史研究の新たなる構築を完成させたいと考えている。

